

開催報告

企画展「昭和の街かど」

安藤 久美子
宇都宮 美紀

1 はじめに

当館では企画展「昭和の街かど～モノと映像でよみがえる懐かしい記憶～」を開催した。昭和30年代の街かどを再現し、当時の家電製品や玩具などを併せて展示することで、世代によっては記憶に残る時代を想起させ、現在の子どもたちには空間体験によって身近な歴史に触れるきっかけにしようとするものである。

近年、昭和の生活をクローズアップした展示が全国各地の博物館で開催されるようになっていく。愛知県の師勝町歴史民俗資料館は別名を「昭和日常博物館」と称し、その名のとおり平成5年より昭和の生活にこだわった企画展・特別展を開催しているほか、大津市歴史博物館「家族の一世紀」（平成10年9月30日～11月15日）、江戸東京博物館「近くて懐かしい昭和」（平成12年7月29日～9月17日）、松戸市立博物館「戦後松戸の生活革新」（平成12年10月7日～11月26日）、福井県立博物館「ちょっと昔のくらしぶり」（平成13年4月27日～6月10日）などがある。また、昭和のくらしをテーマにした出版物も多く刊行されており、目まぐるしく変化する現代において、昭和のくらしへの回顧は全国的な流れとなりつつある。

当館では例年夏に企画展を開催しているが、江戸時代までの歴史を取り上げる機会が多く、どうしても成人層の入館者が目立つ結果となっていた。子どもが興味関心を呼び起こすよう体験コーナーなども設置していたが、家族連れの来館への動機づけは弱く、歴史展示が来館者にとって敷居が高いものになっていたことは否めない。企画展「昭和の街かど」での試みたことは、さまざまな博物館などですでに実践されており新鮮さはないといえよう。しかし、この企画展には今後の博物館の諸活動のヒントが見いだされてくるのではないかと考え、企画展示を行うまでの経過、開催結果及びアンケート集計結果などを紹介する。

2 展示の準備経過

この企画展示の出発点は、平成12年度に寄贈された故山内一郎氏が撮影した戦前から戦後の写真資料の整理調査を進めている時に、当時の人々のくらしも一緒に展示できないかという担当者内の雑談からである。急展開で展示テーマを昭和の暮らしに変更したのは、平成12年度も終わろうとしていた頃で、通常当館では自主企画展に3年程度の準備期間を取られていることからすると、時間に追われていた感がある。

展示計画は、昭和の暮らしをテーマに「昭和30年代」、「くらし」、「駄菓子屋」、「理髪店」、「懐かしい」、「モノ」、「映像」、「写真」、「記録」のキーワードをもとに検討された。担当メンバーの間では、当館のこれまでの企画展では試みたことのなかった情景再現の展示手法をどうしても展

示の目玉として取り入れたいと考えていた。展示を予定する資料は一般には手のとどかない文化財ではなく、人々の記憶に残るふだんの暮らしの中のモノばかりである。通常の展示では資料に対して資料解説パネルが付けられるが、今回の展示では必要ないのではないかという議論も加わった。そこで「昭和の街かど」展では、情景再現することによって得られる効果を最大限活用し、人々の記憶を呼び起こし次世代へ伝える場を提供することを展示の目標にした。

展示準備では、写真・映像を扱う部門と街かど再現やモノ資料を扱う部門の大きく2つに分け、映像作家である上田雅一氏と大洲市で町おこしイベントをされコレクターでもある広見元司氏の2名に展示協力者として参加いただいた。当館の昭和30年代の生活用具や映像資料の収蔵状況は皆無に近かったことから、企画展への展示資料の募集を行うこととした。チラシや歴博だより28号を利用するとともに、新聞雑誌などに資料募集の情報を取り上げていただいた。平成13年11月から平成14年3月末までの5ヶ月間の募集期間中、県内外から約90件の情報や資料の提供があった。

写真については、故山内一郎氏写真資料の他に故村上節太郎氏写真資料（平成14年度寄贈）が加わる膨大な資料群となり、松山地域に絞った抜き取り調査となった。映像は8ミリや16ミリフィルムなどの記録媒体から今後の展示活用を視野に入れ、DVDへの変換を採用した。映像資料は映像だけでなく音声等も加わり著作者を追跡することが難しく、一部音声の吹き替えで対処するなど、映像資料の収集、公開する上での難しさを痛感した。

街かどの再現にあたっては、基本設計を業者をお願いすることとした。企画展示室で街かどを効果的に演出するための展示デザインが必要と判断したためである。基本設計にあたっては、担当学芸員、展示協力者、展示設計者の3者間で打ち合わせの場を設け、アイデアや意見、情報交換を行い、お互いの進捗状況を確認し課題の再確認を行うようにした。実施設計や施工にあっても、関係者が集まる場を設けることで、お互いに再現する「街かど」のイメージを共有化にできるようにした。これまでの企画展での学芸員主導とは異なり、お互いがプロとして良いものを作りたいという雰囲気生まれ、スムーズに連携を図ることができたように思う。

3 展示内容

展示は以下の6つのゾーンに分かれた。

①昭和を走ったクルマたち

昭和30年代から40年代にかけて街かどを走った車やバイクを展示するもので、展示コーナーはエントランスホールに設置した。また、企画展のプレ展示と題して会期を前倒しして4月14日から行い、企画展の情報周知の役割を持たせた。

②昭和の街かど ―レンズがとらえた戦後松山―

故山内一郎氏・故村上節太郎氏写真資料を中心に現在の風景と対称しながら、街かどの移り変わりを紹介する。このコーナーもエントランスホールの改札近くに設け、「昭和の街かど」のプロログとした。スペースの問題ですべてを公開することが出来ないため、関連図書として『昭和の街かど～カメラがとらえた戦後松山～』を刊行した。

③昭和街かど博物館

企画展示室の約300平方メートルを使用し、モータース、雑貨屋、理髪店、洋裁店、銭湯、書

店、電気店の7店舗ともに、茶の間や子供部屋、縁側など生活空間も併せて再現した。展示室内では部屋に置いたステレオのスピーカーを利用し、昭和30年～40年代のアニメソングを流した。

再現した家屋の内部をどの部分まで観覧を可能にするかは、担当学芸員の中でも最後まで意見が分かれた。展示監視員2名を配置したが、造作によって死角ばかりの空間ではすべてを監視することは困難であった。結果、資料の保全確保のため家屋の扉をすべて閉鎖しないが、パーティションによって進入を禁止することとした。写真撮影については、個人で楽しむことに限り企画展示室のみ写真撮影を許可した。



街かど展示風景

④愛媛の記録映像・思い出のシネマ

昭和の愛媛を記録した映像の放映。テレビが普及する以前に庶民の娯楽として黄金期を迎えた映画に関係する資料を展示した。

展示室で上映した作品は以下の3作品である。

- ・「段々畑の人々」(昭和26年)

企画：全国土地改良事業団体連合会

製作：新理研映画株式会社

内容：昭和20年代後半の宇和島市九島を舞台に、段々畑の労働の厳しさを描いたもの

- ・「土の暦」

製作：上田雅一氏

内容：昭和40年の松山市星が岡での稲作の一年を追った記録映像

- ・「古城再現」(昭和43年)

製作：上田雅一氏

内容：昭和41年の年末から約一年がかりで復元された松山城小天守ほか五棟の城郭工事についての記録映像

⑤昭和の生活道具

昭和の暮らしを取り巻いた懐かしい生活用具を中心に展示。展示資料のほとんどが資料募集に応募のあったものである。

⑥昔の遊び

「手作り日光写真を写そう!」「リリヤンで編んでみよう!」として体験教室を7月6日から企画展終了日まで52日間、午後1時から4時の間で実施し、懐かしい昭和の遊びが親子で楽しめるようにした。



体験学習風景

4 広報

企画展「昭和の街かど」では、これまで行ってきた広報活動の他に、来館者のターゲットを明確にし、広報においても新たな試みを積極的に組み入れることにした。1章でも掲げたように当館の企画展は例年夏に開催しているが、入館者数の伸び悩みは大きな課題であった。当館の昨年1年間の入館者の動向をみてゆくと、小中学校の児童生徒や高齢者の入館が多く、20代から40代までの入館が少ないことが傾向としてあらわれている。

そこで企画展の広報活動では、人口の多い中予地域在住者や20代から40代の年齢層の来館を促すことを重点におき、以下の3つを新たに行った。

①プレ展示

来館者の多いゴールデンウィーク前の4月14日からプレ展示「昭和を走ったクルマたち」を実施し、夏に開催する企画展へのリピートを促した。同時に企画展のポスター・チラシによる広報を始めた。

②情報誌などへの有料広告

普段博物館に馴染みのない20代から30代の若い年齢層に周知をはかるため、タウン誌2誌に2ヶ月（7月号、8月号）有料広告を行うことにした。『タウン情報松山』は1号当たり45,000部発行し、読者層は男女ともに20代を中心、購買地域は中予地域が83パーセント、南予地域は5パーセントで松山中心の情報源として地元根付いた情報誌である。一方『愛媛こまち』は1号当たり28,000部発行し、読者層は20代から30代の働く女性、四国地域の女性行動範囲を網羅したエ

モノと映像でよみがえる懐かしい記憶
前売り券発売中!!
前売券販売期間：6月7日～7月5日

昭和の街かど

<http://joho.ehime-iinet.or.jp/prehaku/>

昭和30年代。
ミント色のスクーターに乗って、溜息と走り抜け
ればみんな振り返る、流行に敏感な女の子たちの
憧れ。ファッション、おもちゃ、お菓子・・・
知らなかったって、なんとなく可愛くて
オシャレなモノばかり。
そんなモノたちをいっしょに詰めこんだ
「街かど」が、ひと夏だけ博物館の
中に出て!!
ノスタルジックな「街かど」を歩きに
きませんか?

平成14年7月9日(火)～9月1日(日)

観覧料:	全席	当日・企画展別途	歩数観覧券
大人(15歳以上)	500円(400円)	700円(600円)	400円
小中学生	250円(200円)	250円(200円)	200円

※1日2回(10時・12時開催)
※6.5歳以下(小学生未満)・歩数観覧券利用
観覧時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) 休館日：毎週日曜日

愛媛県歴史文化博物館
〒797-8511 愛媛県東予郡伊予郡松山町之町4-11-2 電話0894-62-6222

愛媛こまち7月号

ひがくれて
ごはん
ですよー
と
ママが
いうので

ハイハイ
いまいきますよー

とわたし
おじいさんと
おとうとと
ミーゴで
いきました。

昭和の街かど
モノと映像でよみがえる懐かしい記憶
平成14年7月9日(火)～9月1日(日)
大人(15歳以上) 500円(400円) 当日・企画展別途 歩数観覧券 400円
小中学生 250円(200円) 250円(200円) 200円
※1日2回(10時・12時開催)
※6.5歳以下(小学生未満)・歩数観覧券利用
観覧時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) 休館日：毎週日曜日

愛媛県歴史文化博物館
〒797-8511 愛媛県東予郡伊予郡松山町之町4-11-2 電話0894-62-6222

タウン情報まつやま8月号

リア情報誌である。そこで広告内容は雑誌の読者層にあわせて、20代前半の女性向け、20代から30代の家族向けといったように4種類を作成した。その他、7月13日から9月1日まで松山市の湊町にある銀天街 GALAXY VISIONで30秒のCMを1時間に2回計647回放映した。

③れきはく新聞

企画展により親しみが湧くように、企画展準備の進捗状況や展示内容を紹介する「れきはく新聞」を3号（各10,000部）発行し、博物館内と県内の高速道路サービスエリアで配布した。

5 企画展を記録する

例年、企画展では展示資料のデータや調査研究の成果をまとめた図録を刊行している。企画展の開催にあわせて、関連図書『昭和の街かど～カメラがとらえた戦後松山～』を刊行した。これは、展示スペースの関係で取り上げられなかった写真や調査研究の成果をまとめたものである。企画展「昭和の街かど」の図録は、会期終了後にCD-ROM版で作成した。CD-ROMには、展示空間の他に関連事業や企画展準備の様子などを収録した。

6 開催結果

企画展は、7月9日から9月1日まで開催日数49日の間、大きなトラブルもなく、来館者をはじめ各関係者にも大好評を博し、無事終了できた。会期中の企画展総入場者は28,162人、1日平均約574人。この数字はこれまで開催した企画展の中で最高の入場者数であった。企画展開催中の常設展総入場者数も23,866人と過去最高であった。企画展入場者が常設展を上回ったことから、企画展に強い関心が集まっていたことが伺える。企画展「昭和の街かど」の内容には、歴史というよりちょっと昔といった気軽さがあり、幅広い年齢層に受け入れられやすいテーマであったといえるだろう。

実物資料と情景再現の展示演出の組み合わせについても概ね好評であった。展示室では、身振り手振りで語る親子連れや立ち止まって話し込む人の姿が多く見られ、通常よりも滞在時間が長く、一時混雑することがあった。

関連事業では、北原照久氏による「ブリキのおもちゃの世界」と題した講演会に311人、関連講座を6講座を開講し計182人、安野侑志さんによる「ヤッサンの紙芝居がやってくる」の2日間4回の紙芝居公演で1回当たり約40名の子どもを中心とした観客が集まった。体験学習室で実施した懐かしい昭和の遊び「手作り日光写真を写そう！」「リリヤンで編んでみよう！」では、日光写真の参加者は657人、リリヤンの参加者470人であった。日光写真の製作時間は約5～10分程度に対し、リリヤンを編むでは約20～30分程度かかるため、短時間で済む日光写真を選択する家族連れが目立った。

企画展では、出口付近に自由回答のアンケートコーナーを設け、総入場者数の約4パーセントである1,037枚を回収した。

(1) 入場者の構成

「年齢別」では10代がもっとも多く、続いて30代、20代、40代の順であった(表1)。「在住地域別」では、中予地域が全体の45パーセントを占め、当館が立地する南予地域34パーセントであった(表2)。「来館回数」では「はじめて」が45パーセントで最多、3回以上の33パーセントを上回っていた(表3)。「企画展を何でお知りになりましたか」という問いでは、ポスター・チラシが22パーセントで例年通り一番多かった(表4)。一方でテレビ・新聞・雑誌などマスコミ関係を合計すると約4割近くにのぼっている。

広報に重点をおいた中予地域のデータのみを抽出してみると、「来館回数」では「はじめて」

表1 年代別来館者数

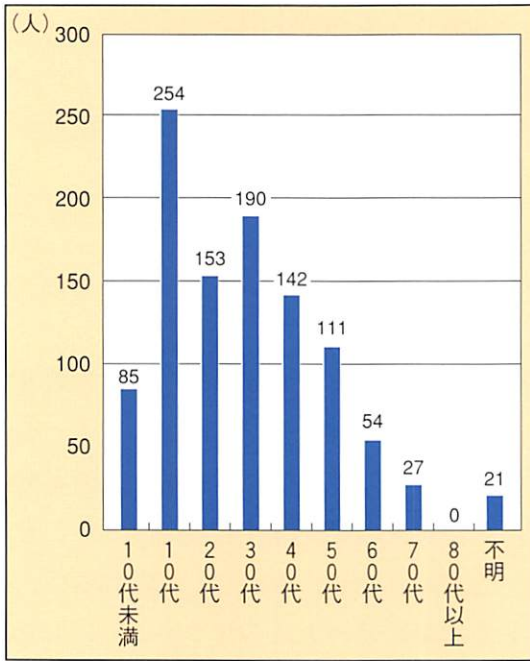


表2 情報源

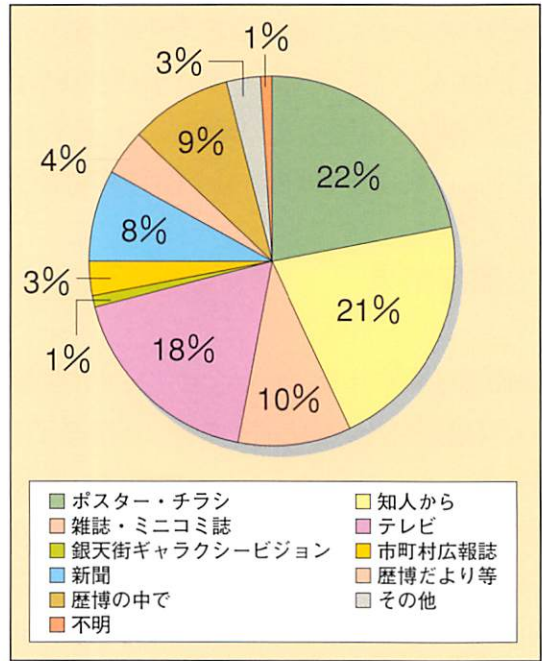


表3 来館回数

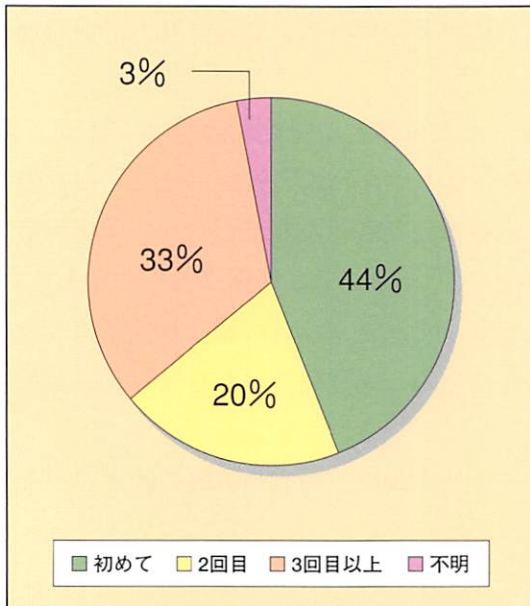
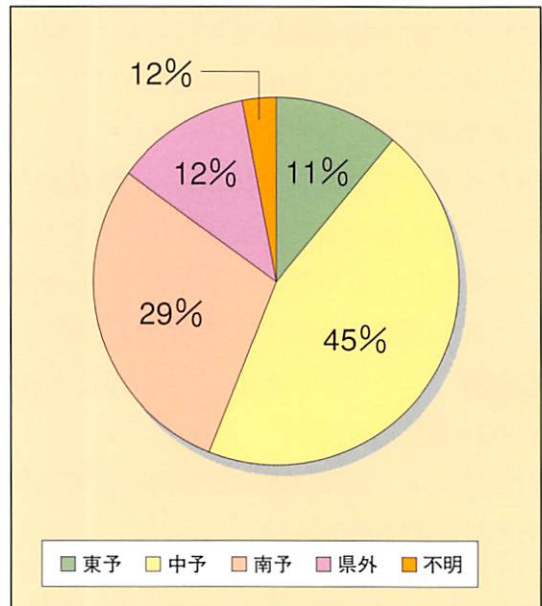


表4 在住地域



が全体の46パーセントと半数近くを占めた（表5）。そのうち「年齢別」に見てゆくと20代が最も多く、60代、50代の順になる（表6）。「企画展を何でお知りになりましたか」では、テレビ、知人から、ポスター・チラシに続き、有料広告を入れた雑誌・ミニコミ誌が挙げられていた（表7）。

表5 来館回数（中予地域のみ）

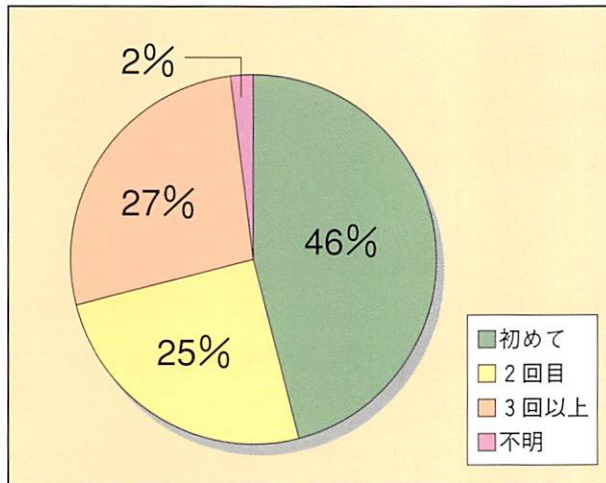


表6 年代別来館回数（中予地域のみ）

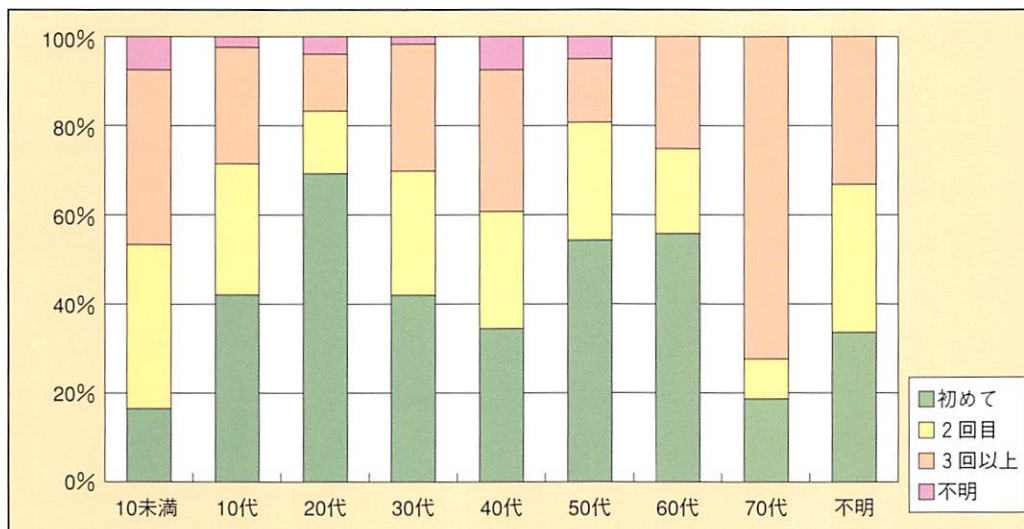
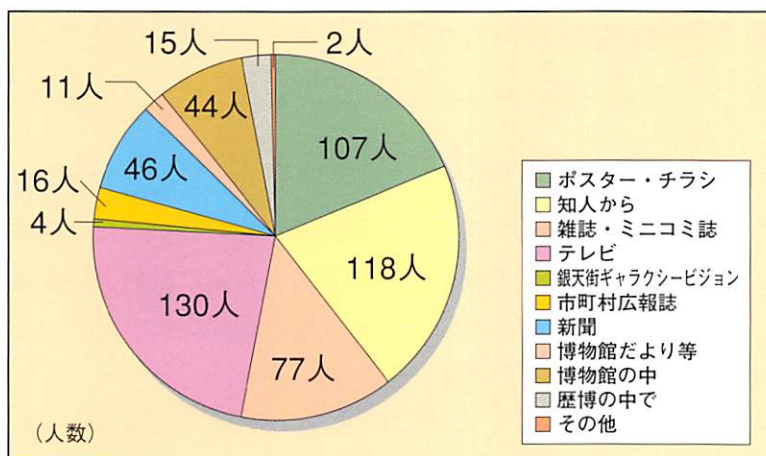


表7 情報源（中予地域のみ）



自由回答のアンケート調査であるため、一概にはこの結果が正確に表れているとは言い切れないだろう。「年齢別」や「来館回数」の結果は、リピーターよりも新規の来館者が多かったことをさしている。今回広報手段として行ったプレ展示は、来館者への企画展の周知と共に、企画展に関するマスコミ関係の取材は2度の機会を得ることができた。雑誌への有料広告もあわせると、普段博物館に馴染みのない人たちがテレビや新聞・雑誌によって企画展の情報を目にする機会はこれまでより多かったことが要因になったと考えられる。

今後広報としては、未だ来館したことのない人々にどのような方法で博物館の存在を認知してもらうか、また展示内容に興味を持つ対象者に、展示情報の提供方法や魅力的に伝えるための手段について更に検討する必要があるだろう。

(2) 展示演出の評価

アンケートでは最後に「あなたにとって懐かしかったもの、目新しかったものはありましたか。思い出もあったら、いっしょに書いてください」という自由記入欄を設けていた。これは企画展の中でどの部分に心を揺さぶられたのかを聞いたものである。

予想どおり大部分が「懐かしかった」という感想であったが、その一方で、資料が詰め込まれた展示空間の中から、資料の固有名詞が予想以上に書き込まれた。街かどの再現が最も多く、続いて入場者が自由に触ることのできたためか手回し洗濯機があげられたが、テレビや冷蔵庫などの代表的な電化製品から、車、駄菓子、おもちゃや雑誌のタイトルにいたるまで、中にはイラスト入りのものもあった。「孫たちに話ながら楽しく拝見致しました」「昔の事を父に聞いていて、その事が実際目に見えて良かったです」とアンケートからも立ち止まって話し込む入場者の姿が見えてくる。思い出を語る文章からは、観覧者がこの企画展の即席解説員であったことがうかがえた。実際、展示室は話し声が絶えず聞こえ、滞留する時間も長かった。この点は人々の記憶を呼び起こし次世代へ伝える場を提供するという展示の目標に対して一定の評価ができるのではないだろうか。その一方で、来館者から多く寄せられた「懐かしかった」という感想からは、展示が郷愁だけを追い求めすぎているのではと懸念が残る。低年齢層にとっては「生まれてないから分からなかった」と資料解説がなかったことの指摘があったことは反省すべき点としてあげられる。しかしこれは解説パネルが必要であったということではなく、解説パネルがなかったことに対して新鮮さを感じたと好意的な感想もあった。このことから、展示内容によって、観覧者の理解を深めるためにどのような方法を用いるべきか検討する必要があるだろう。また、展示内容を決定する過程で、展示に対する来館者の年代やそれぞれの知識やイメージを的確につかみ、今後の企画展の向上につなげていきたい。

謝辞

本企画展の展示協力をいただいた上田雅一氏、広見元司氏、展示に関して助言いただいた師勝町歴史民俗資料館市橋芳則学芸員、福井県立博物館笠松雅弘主任学芸員、安城市歴史博物館近藤義行学芸係長、高知県立歴史民俗資料館中村淳子主任学芸員、その他資料情報提供いただいた多くの方々のおかげで、本企画展が実現しました。ここに感謝の意を表します。

(註1)「昭和の街かど」展は筆者の他に、井上淳(主任学芸員)、土居聡朋、東昇、平井誠、山内治朋(学芸員)が担当した。

愛媛県歴史文化博物館研究紀要 第8号

2003年3月31日 発行

編集・発行 愛媛県歴史文化博物館
〒797-8511 東宇和郡宇和町卯之町4-11-2
TEL 0894-62-6222
FAX 0894-62-6161

印刷 原印刷株式会社

本冊子は故紙を含む再生紙を使用しています。